

リレーコラム 「相撲部屋の話」

高橋 武 秀(たかはし たけひで)さん



一般社団法人 日本自動車部品工業会
副会長・専務理事

日機連・参与

■まずは話の発端から・・・

相撲の番付にかこつけて自分の知っている相撲部屋について書こうと思っている。

尤も、相撲部屋に縁が出来た、いわば話の発端は地域の少年野球チームの手伝いを始めたかれこれ20年前にさかのぼる。少し遠回りになるけれどまずは話の発端から。

息子が三人います。三人目は就職活動中ですが上二人は当然というか幸いにしてというかきちんと月給をいただける身分になっています。

今は一人で大きくなったような顔をしているこ奴らも当然小学生だった時期があり、その時期に長男が友達に誘われて洗足池の球場をホームグラウンドにしている軟式の少年野球チームに入ったわけです。

長男の学年は手伝ってくれる大人の人数が足りなかったのか、練習の見学に出かけてぼっと立っていたら仕事が回ってきた感じで、コーチにさせられたのが運の尽き。

長男が6年生の時にまあ、単に私が上島竜平とかダチョウ倶楽部のギャグの「どうぞどうぞ」という奴に乗せられてついに私が監督！！

長男は私にさんざん体罰を食らったと今でもぶつぶつ言うときがありますがそれはさておき。（まあ、他のお子さんをこつんとやるわけにはいかんでしょう？）

4つ下の次男も兄ちゃんの芋蔓で同じチームに入り、ここでF先生とのご縁が出来たわけです。

■キーパーソン・F先生登場

F先生の長男、次男とうちの次男、三男が同学年で、三男もこれまた芋蔓で同じチームへ。

デ、先生は都合5年、私はなんだかんだで10年近く（子供が卒業したあとも何となく手伝っていたので）おなじ野球チームに関わり、家族ぐるみで未だにおつきあいをさせて貰っています。

ここまですっと野球の話で、相撲はどこに関わってくるんだとお思いのあなた、もうすぐ出てきますよ、相撲の話は。

で、このF先生の奥様がA部屋のA親方の奥さん（いわゆるおかみさん）と大親友で、まず先生がA部屋に出入りが始まっていたようです。

一方、時を経て大学院でスポーツ経営を専攻していたうちの長男が修士論文の課題にプロ格

闘技の経営課題を取り上げたいと言いだしたわけです。

プロの格闘競技で経営体として成立している（選手が切符を手売りし、その売り上げがすなわちギャラという、とんでも無いことがなく、きちんと給料がもらえるだけの興行が打てる）格闘技は相撲だけだと言うことで、相撲部屋の経営問題と人材育成を論文のテーマに取り上げる事になりました。

そこで時の氏神というか天の配剤というか、F先生再度登場というわけです。この時点で先生はA部屋の後援会の太立て者になって居られたので、長男をA部屋に紹介いただきました。

■そういう訳で、相撲部屋へと

相撲の親方って言うとはどんな感じを持たれますかね？矢張り部屋という特別な社会に蟠踞している特別な存在という感じを持たれるのではありませんか？

おかげさまでご紹介いただいたA部屋は、親方、おかみさん共に開放的な性格の方で、事例研究のインタビュー調査にも積極的にご協力を頂き、十分な取材ができたようです。

相撲部屋というと、一時期新聞報道にも出たことがあります、部屋の中でのいじめとか体罰とかの問題がありました。いじめは自分がやられたことを人にやり返すという形でいわば体質として遺伝していきます。

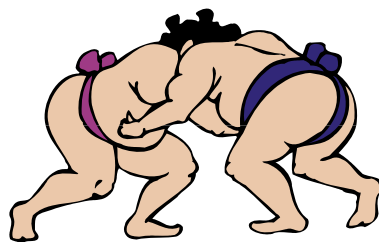
ところがこのA親方は「自分がやられてイヤだったことは弟子にはしないし、させない」と明確な自己規律を持っておられます。

部屋での稽古は広く取られた窓から通行人に丸見えになっており、「他人の目」が強力な抑止力になる建物の作りにもなっています。

こういう親方の下で育っているお弟子さんも又非常に人なつっこい人が多く、長男は部屋に出入りを重ねる内に力士達とすっかり懇ろになり、下を向いて歩けないほどちゃんこを振る舞って頂いてと、まあ、すっかり「新弟子」扱いだったようです。（笑）

そんなご縁で息子のお礼をかねてA部屋の後援会に名を連ね、稽古見学やら、千秋楽の打ち上げやらで、私の方も部屋に出入りするようになりました。

ここまで長いなあ・・・でも書かないとわからないでしょ？何故私が相撲部屋に出入りできるか。



■さて、ここから本題

さてここから本題。

相撲は序の口→序二段→三段目→幕下→十両→幕内→小結→関脇→大関→横綱という階級で構成されていることはご存じですね？階級の上下は本場所での通算成績が勝ちこしか負け越しか、上がる枚数は白星と黒星の差がどのくらいか（下がるときはその逆）によってのみ決まります。番付の上下は極めて客観的です。

稽古見学に部屋を尋ねると、大体7時半の時点で序の口、序二段下位の稽古は終わっています。

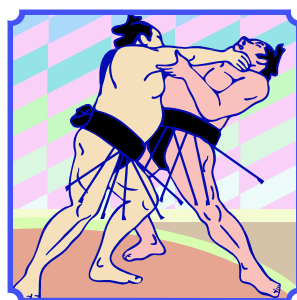
ぶつかり稽古、三番稽古などは序の口は序の口同志、序二段は序二段同志という感じで基本ほぼ同じくらいの実力の相手から始めて徐々に上の人と当たると言うようになっています。

力に差が有りすぎると却って稽古にならないし、弱い方が怪我をする恐れがあるそうです。

各段の上位にいる子は上のクラスとも稽古をしなければ成りません。三段目上位にいる力士は、三段目と稽古をしたあと幕下の稽古にも参加します。まあ、強い人とやらないと経験値は上がら無いと言うこともあって、稽古量倍付けみたいな感じです。

下位だと立ち合いのあたりもそれほど力強い感じはしません。なんか「ペチョ」って感じで当たっていますが、だんだん上に行くに従って音が「ベチ」から「ゴス」さらには「ガッツン」と激しく大きくなってきます。

相撲は基本「アネロビクス」（無酸素運動）です。相手に当たって、押し切るまで、息を詰めて力が抜けないようにしています。ぶつかり稽古の間に聞こえるのは当たるときの音と、一番取り終わったあとの鞆を吹くような荒い息づかいだけという感じになります。



■ぶつかり稽古と番付の差

ぶつかり稽古は面白いシステムで、稽古で勝った方が土俵を独占できます。続けて相撲が取れるわけです。勝てば勝つほど体はきついわけです。

だらしない奴なら適当に土俵を降りる工夫をするでしょうが、それをやると力はつきません。結局本人のやる気とその子の将来に直接リンクする練習システムになっているわけです。

番付の差は稽古場だとよくわかります。序の口は序二段と当たると面白いように転がされ、その序二段は三段目とやるとこてんぱんに負け、三段目は幕下とやると全く勝てません。15番に1番くらいの感じじゃないでしょうかね、勝てるのは。

で、幕下は十両とやると又話にならず、十両は幕内とやるとこれまた話にならず……。カテゴリーの差は恐ろしいほどに実力差を反映しています。

A部屋では大関になる前の鶴竜関が出稽古に見えているのを拝見したことがありますが、まあ、何というか、実力の隔絶振りは凄まじく、幕下クラスはまさに「鎧袖一触」です。テレビで幕内上位の相撲をご覧になると同格の人同士の相撲です、それほど差があるとは思われないでしょうが、実は番付一枚の差は計り知れない実力差の表示なのです。

さて、そう言う目で見ると、横綱という地位が如何にとんでも無い地位かはおわかりいただけるのではないのでしょうか？



■「今場所は家賃が高かった」

番付がらみで面白いものの言い方を一つご紹介しておきます。

ある場所、A部屋の力士が6勝1敗で勝ちこし大きく番付をあげました。新しい地位では2勝5敗と負け越して直ちに自己最高位を陥落したとしましょう。

これを評した親方の言葉が曰く「今場所は家賃が高かった」。どことなくユーモラスな言い方ですが、実に言い得て妙でしょう？

その人の実力に見合わない、家計費に占める家賃の比率が高すぎるマンションの一室、ぼつねんと負けが込んでたたずんでいる一人の力士の図というのはすぐ目に浮かびます。

それでも高い家賃のマンションに住みたくて、弟子は皆稽古に汗を流しています。昔はBSでそれこそ序二段クラスから中継してくれていましたが、一連の騒動以来、下の方の放送は無くなっているようです。土日には幕下ぐらいから中継が入っているようですが、この三月場所はどうなってますことやら。

気がつかれたらどうぞ、「家賃の高い部屋に引っ越そう」と必死に戦っている若い力士達の様子も見てやって下さい。

誰かお気に入りを見つけて応援してやっていただくと（心の中だけで結構です）その子が出世したときは嬉しさが又ひとしおだろうと思います。